

#### 44. 運動負荷およびジピリダモール負荷 $^{201}\text{Tl}$ 心筋 SPECT の比較を行った完全左脚ブロックの一症例 — $^{133}\text{Xe}$ クリアランス法による局所心筋血流量の検討を加えて —

大槻 克一 杉原 洋樹 谷口 洋子  
 片平 敏雄 馬本 郁男 原田 佳明  
 志賀 浩治 中川 達哉 中川 雅夫  
 (京府医大・二内)  
 落合 正和 (京府洛東病院・循)

$^{133}\text{Xe}$  クリアランス法にてジピリダモール (DIP) 負荷時の中隔部心筋血流動態を検討し、興味ある所見を示した完全左脚ブロックの一症例を経験したので報告する。症例は 60 歳、女性。主訴は労作時の動悸および息切れ。心エコー図、心プールシンチグラフィでは、中隔部の壁運動異常が認められ、左室駆出率は 45% と軽度低下を示した。運動負荷  $^{201}\text{Tl}$  心筋 SPECT では前壁中隔の一過性灌流低下が認められた。一方、DIP 負荷  $^{201}\text{Tl}$  心筋 SPECT では取り込み低下の所見は認めなかった。また、冠動脈造影では有意な狭窄は認めなかった。 $^{133}\text{Xe}$  クリアランス法による検討では、側壁に対する中隔の血流低下は、コントロール時にもわずかに認められるが、130/分の右房ペースング (RAP) でより顕著であり、中隔部と側壁部の局所心筋血流量の比 S/L はそれぞれ 0.89, 0.58 と低下を認めた。RAP に DIP 負荷を加えると中隔、側壁とも血流量は増加するが、中隔の方が増加度が高く、S/L はコントロール時と同じ 0.89 を示した。側壁に比し低下していた中隔の心筋血流量が DIP 負荷時に相対的な増加を認め、中隔部の冠血流予備能残存が確かめられた。

以上より、完全左脚ブロック症例における中隔部の局所心筋血流量の低下は虚血ではなく、刺激伝導様式の異常にもとづく中隔部の壁運動低下による心筋酸素需要の低下と関連することが示唆された。

#### 45. Adrenal incidentaloma の副腎シンチグラフィ

小泉 正 末松 徹 吉田 祥二  
 元原 智文 澤田 彰 柳瀬 正和  
 西井 博則 松本 敏幸  
 (兵庫県立成人病セ・放)

近年増加している副腎偶発腫瘍 (incidentaloma) の診

断における副腎シンチグラフィの意義について検討した。

対象は兵庫県立成人病センター開設後 8 年間に CT, US あるいは MRI により偶然に発見された副腎腫瘍で、同時期に副腎シンチグラフィを施行した 23 症例とした。

腫瘍存在部位は左副腎が 11 例、右副腎が 12 例であり、23 例中腺腫が 12 例と最も多かった。のう腫、転移性腫瘍がそれぞれ 1 例、経過観察が 9 例であった。内分泌的には無機能性が 14 例、機能性が 9 例であった。

腫瘍の大きさは CT 像の長径を指標として用いたが、1.1~2 (cm) のものが 11 例 (47.8%) と最も多く、次いで 2.1~3 (cm) が 8 例で 4 (cm) を超えるものは見られなかった。

副腎シンチグラフィによる集積度の検討には CNR (Contrast-to-noise ratio) を用いて評価した。患側の方が高い集積を示すもの、対称性集積を示すものを合わせると 23 例中 22 例を占め、そのうち 12 例は手術で腺腫と診断された。患側の方が低い集積を示した残り 1 例はのう腫であった。また、正常例では左右の CNR に有意差はなかったが、機能性、無機能性 incidentaloma では患側の方が有意に高かった。しかし、CNR の比については機能性、無機能性 incidentaloma の間に有意差は認めなかった。副腎シンチグラフィのみでは機能性、無機能性 incidentaloma の鑑別は困難と考えられた。

#### 46. 甲状腺腫瘍における $^{201}\text{Tl}$ シンチグラフィの有用性に関する検討

大田 豊承 高田 政彦 游 逸明  
 永田 保 山崎 俊江 高橋 雅文  
 大西 英雄 増田 一孝 鈴木 輝康  
 山本 逸雄 森田 陸司 (滋賀医大・放)

甲状腺腫瘍の良悪性の鑑別診断は CT, MR, エコーのいずれの画像診断によっても基準が確立されていない。一方 Tl シンチは甲状腺腫瘍の存在診断、再発の検索に有用な検査であることが古くから知られ、広く利用されている。タリウムシンチの delayed phase の検討が、甲状腺腫瘍の良悪性の鑑別に有用であるという報告が越智らによってなされて以来、同検査法を支持する報告や否定的な報告が数多くなされてきた。

今回われわれはタリウムシンチを行った症例を追跡調査し、同検査法の有用性の検討を行ったので報告する。

〈結果〉

今回のわれわれの検討では本検査法の sensitivity は